

聖書:ルカの福音書10章25~37節

説教:隣人を自分自身のように愛しなさい

はじめに

今日の箇所は、どこかで何度も聞いたことがあるほど有名な箇所です。最近、メッセージが難しくわかりにくいということを言われておりましたが、ここはわかりやすい。「あなたもこのサマリア人のように、行って、あわれみ深い行いをするならば永遠のいのちを受け継ぐことができる。私たちも今日から隣人を愛しましょう。」そういう教訓話のようにも見えます。しかし、イエスが私たちに教えたかったことはそういうことなのでしょう。何かもっと大切なことが抜け落ちてはいないか。そのことを考えていきます。

1 永遠のいのちを受け継ぐために

1) なにをしたら？

25節。「さて、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試みようとして言った。「先生。何をしたら、永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか。」

律法の専門家は何をやる人たちか。例えばモーセの十戒の四番目に、「安息日にはいかなる仕事もしてはならない」と書いてある。それはいいのですが、では、してはいけない仕事とは何か。聖書には細かいことは書いていないので、実際の生活で判断できないことが出てきて皆悩んだ。それで聖書を調べて、これはいいけれどこれはだめ、というような細かいルールを定める人が現れた。それが律法学者と呼ばれる人たちでした。

そんなわけで聖書の専門家ですから、イエスが「律法には何と書いていますか」と尋ねられても、すぐに答えられる。27節。「『あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい』、また『あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい』とあります。」

このことばは申命記6章5節とレビ記19章8節にあり、イエスも他の箇所でも、最も大切な戒めとして取り上げています。「あなたの答えは正しい。それを実行すればいのちを得ます」と言って、合格点を与えます。

2) 自分が正しいことを示そうとして

しかし律法の専門家は、そんなことはもすでに実行していると思っているので、イエスの答えに満

足しない。「自分が正しいことを示そうとして」二つ目の質問をする。「では、私の隣人とはだれですか。」

この人が持っている世界観は非常にわかりやすい。律法を守っている人たちと守っていない人たち、この世界は二つの種類の人間に分けられる。自分の隣人とは、律法を守っている人たち。律法を守らない人たちは、隣人ではない。そういう分け方です。

イエスはどちらの方に分類されていたか。イエスが安息日に、右手の萎えた人を癒やしたのを見て、激しく怒ったのが律法学者たちでした。イエスは律法を守るどころか、神に公然と背いて恥じようともしない悪人。そんなやつは絶対に自分の隣人などではない。イエスを試そうとしてやってきた裏にはこんな事情がありました。

2 よきサマリア人のたとえ

1) 祭司とレビ人

律法の専門家の問いかけに対し、イエスはたとえ話をする。一人の旅人が強盗に襲われて道に倒れていたところへ、たまたま通りかかった祭司は、倒れている人を見るなりわざわざ反対側を通り過ぎて行き、レビ人も同じようにする。どうしてそんなことをするのか。不思議に思うでしょう。説明が必要です。

祭司もレビ人もいずれもエルサレムにある神殿で働く聖職者で、普段から自分が汚れていないかどうか、そのことを注意しています。ほかの所んは、イエスの弟子たちが手を洗わないで食事をしているのを見て、律法学者たちがカンカンに怒る場面が出てきます(マタイ15章2節)。それほど厳しい。

ではこの倒れている人について言えばどういうことか。この人が死んでいるならどうなるか。民数記19章11章に「死人に触れる者は、それだけの人のものであれ、七日間汚れる」とあります。もし死んでいるのなら、自分は七日間汚れてしまう。いま、コロナの濃厚接触者は何日間隔離されるとよく似ていて、人前に出られませんし、聖職者としての職務を果たすことができなくなる。倒れている人はまだ生きていても知れませんが、それよりも、自分が汚れてしまうことのほうを恐れて、反対側を通って去ってしまう。

2) 一人のサマリア人

では三人目に登場するのがサマリア人。そもそもサマリア人とはなにものなのか。以前少し触れたことですが復習します。イスラエルはダビデの手で一つの国にまとめられ、その子ソロモンの時代に最も栄えるのですが、ソロモンが亡くなると間もなく紀元前931年に北と南に分裂してしまいます。それ以来二つの国は、民族としては同じユダヤ人であるのに、互いに行き来をしない、道で会っても話をしないという犬猿の間柄になってしまいます。かつて北王国に住んでいた人たちがサマリア人と呼ばれ、南王国の人たちがユダの人々と呼ばれるようになります。宗教的に言えば、ユダの人々にはエルサレムに神殿がありますからそこで礼拝をする。ところがサマリア人はエルサレムに行かず、ゲリジム山と呼ばれる山に独自の神殿を建ててそこで礼拝をしていた。律法の専門家からは、彼らこそ律法に従わない救われない人たちの典型で、自分の隣人であろうはずがない人たちと思われていた。それがこのたとえ話の味噌です。

3) かわいそうに思った

そこでサマリア人は何をしたのか、たどっていきましょう。33節。「ところが、旅をしていた一人のサマリア人は、その人のところに来ると、見てかわいそうに思った。」この「かわいそうに思った」はこんな意味です。例えば、父親が子どもを連れて川に釣りに行ったとしましょう。そこで子どもが足を滑らせて水に流されました。父親はどうしますか。黙って見ているはずはない。からだ濡れるのもかまわず川に入り、自分もおぼれてしまう危険を承知の上で、それでも子どもを助けようとするでしょう。そこには理屈はありません。ただ子どもを死なせたくない、助けたい、そういう一心です。「かわいそうに思った」とは、このような意味です

サマリア人は、自分の身が汚れるかどうか、そんなことなどかまわず近寄って抱き起こし、いろいろ介抱して家畜に乗せて宿屋に連れて行き、治療費まで支払うのです。

4) 同じようにしなさい

このたとえ話をしてから、イエスは律法の専門家に問いかけます。36節。「この三人の中でだれが、強盗に襲われた人の隣人になったと思いますか。」

サマリア人が倒れていた人の隣人であることは、さすがの律法の専門家でも認めざるを得ませ

ん。しかし先ほども言ったように、サマリア人は救われない人たちの筆頭だと思っていますから、まさか自分の口で「サマリア人が隣人です」とは言えない。そこでこう答えた。「その人にあわれみ深い行いをした人です。」

サマリア人ということばを使わずに、どのような表現で正しく答えるか。頭を使ってうまく切り抜けたと思ったでしょう。しかし、イエスはそこで終わりません。37節。「あなたも行って、同じようにしなさい。」

律法の専門家は、サマリア人が自分の隣人になると考えただけでも気分が悪くなったでしょう。彼がこの後どうしたのかは書かれていませんが想像はできます。イエスの問いかけは、律法の専門家にだけではなく私たちにも向けられています。聖書の知識ではない。あわれみ深い行いをした人が、本当の隣人である。「あなたも行って、同じようにしなさい。」私たちはどうなのでしょう。

3 イエス

1) 隣人になる難しさ

もちろん私たちは、イエスのおことばに従って、このサマリア人のようになればと願い、そのようにできたかなと思うときもあります。しかしいつもそうとは限らない。

三四年前です。朝、HBIに向かっている途中、広い道路を横断していた歩行者が車に轢かれるという交通事故の現場をたまたま通ったときのことです。まだ救急車がきていなくて、轢いてしまった人が泣き叫びながらそれでも一生懸命、倒れている人の胸に手を当てて心臓マッサージをしていました。私はそのとき、車を駐めて、なにか手伝うことができるだろうかと考えました。医学的な専門知識があったならそうしたかもしれません。しかしとても自分の手に負えるような状況ではないと思い、そのまま走り去りました。でも、ずっと心に引っかかっています。あのとき私は、車に轢かれて倒れている人に対しても、轢いてしまった人に対しても、どんな理由があつたにせよ、見ていながら通り過ぎたのですから、隣人になることはできなかったのです。

2) 私たちの本当の隣人になられる方

いったい、誰が私たちの本当の隣人になってくれるのでしょうか。イエスは律法の専門家の口を通して示しました。「その人にあわれみ深いことをした人です。」では、誰がそうしてくれるのか。イエスは言われました。「あなたも行って、同じよう

にしなさい。」このように命じるとき、まずイエスが率先して模範を示されます。このたとえ話のサマリア人とは、イエスのことだということは誰もが認めます。倒れている人とは、私たちのことで、イエスの目からご覧になれば、私たちは強盗に襲われて今にも死にかけているほど大変な状態だということです。私は交通事故の被害者の方にも、事故を起こした方にも駆け寄ることはできませんでした。が、イエスは、まるで川で溺れかけている子どもを助けようと走り出す父親のように私たちのところに駆け寄り、あらゆることをしようとされる。ある本によれば、このサマリア人はユダの人々の宿に泊まろうとしたら、よそ者であるということで半殺しの目に遭ったかもしれないと書いていました。確かにイエスは律法学者、祭司長たちの手で十字架で殺されていく。それはひとえに私たちの本当の隣人になるためであったのだとわかってきます。

3) 永遠のいのちを受け継ぐために

律法の専門家は質問しました。永遠のいのちを受け継ぐためにどうしたらよいのか。「何かをする」ことにこだわりました。しかしイエスは、あなたは本当にできるのかと問いかけます。どこまでも「できる」と答えるなら、神はいりません。しかし「できない者です」と告白するならイエスは、どうされるか。18章27節で言われました。

「人にはできないことが、神にはできるのです。」

私たちに永遠のいのちを与えるために、神がどれほどにあわれみ深いことをしてくださっていたのかを覚え、御名をあがめます。